

いよいよ六波羅滅亡のシーンです。北方探題の北条仲時らが近江・番場宿の蓮華寺で集団自決し、討幕派が京都を制圧しました。蓮華寺は、間宮康雄さんのお父さんが任職だったお寺で、楽しむ会の例会でも訪ねたところ。そのとき目にした自決者たちの墓列が眼に浮かびます。9月末、紀州の田辺・湯浅への一泊旅行に出かけることを決めて、散会。この日読んだページは次の通りです。

(一) 足利殿上洛の事

(二) 久我繩手合戦の事

北条氏、上洛の尊氏に人質を要求 (p35~38)

幕府を握る得宗、北条高時は、六波羅救援と後醍醐が籠る船上山攻撃のため、北条一門の名越高家と外様筆頭の足利尊氏を両大将とする鎌倉勢の出撃を命じた。尊氏は倒幕の決意を胸に秘め、妻子、一族、郎党をこぞつての上洛準備に入る。これを怪しんだ北条氏は尊氏に妻子の人質と忠誠を誓う起請文を要求。

尊氏、北条氏の要求を入れて出陣 (p38~41)

尊氏は、弟直義の説得で幕府の要求を入れ、妻子を鎌倉に残し、幕府に起請文を差し出して上洛。京都に着くと、ひそかに船上山に使いを出して、後醍醐天皇から「朝敵追罰」の綸旨を得た。

※尊氏の祖父家時の置文 八幡太郎義家は「七代後に生まれ替わって天下を取る」と遺言した。しかし、七代に当たる家時は実現困難と悟り「三代のうちに天下を」と置文して、自害した。その三代目が尊氏。学界には眉唾説もあるが、足利歴代に天下取りの悲願が何らかの形で引き継がれていて、尊氏の決意につながったのではないか。後醍醐の綸旨について梅松論は「細川和氏、上杉重能が密かに賜って、上洛途中の近江鏡駅で披露した」と伝える。「伯耆国より勅命を蒙ったので」という書き出しの尊氏の軍勢催促状が、名越高家と六波羅を出陣する元弘3年(1333)4月27日以前から諸国の武士に発給され始めているので、倒幕工作が事前にかなり進行していたことは疑えない。

(三) 名越殿討死の事

(四) 足利殿大江山を打ち越ゆる事

名越高家の討死と尊氏の篠村入り (p43~47)

上洛した両大將は大手の名越軍が山陽道經由、搦手の足利軍が山陰道經由と、攻撃ルートを定め、4月

27日、船上山攻撃に向かう。ところが名越高家は洛南の久我繩手で遭遇した赤松軍の佐用範家が放った矢で早々と戦死。尊氏はそしらぬ顔で桂川西岸から老いの坂を越えて丹波の篠村に陣を進めた。

(五) 五月七日合戦の事

尊氏、篠村で倒幕挙兵 (p50~52、56~60)

篠村の尊氏の許に近国の武士が続々集結。尊氏は篠村八幡宮に必勝の願文を捧げ、破竹の勢いで元、大内裏のあつた内野に突撃した。

足利、千種、赤松軍六波羅を包囲 (p64~67)

足利軍の内野攻撃に呼应して、千種軍は竹田、伏見、赤松軍は東寺方面で、六波羅軍と交戦。どの戦線も討幕軍が優勢となり、六波羅はついに寄せ手に包囲される窮地に陥った。

(六) 六波羅落つる事

六波羅、京都を脱出 (p70~71、74~80)

六波羅の南北両探題は天皇、上皇らを連れて鎌倉に逃れるため、五月七日夜、京都を脱出した。ところが、山科の手前で南探題北条時益が野伏の矢で討死、翌日も野伏の襲撃は止まず、脱落者を出しながらようやく湖東の篠原宿にたどり着いた。

(七) 番場自害の事

六波羅勢、番場・蓮華寺で集団自決 (p82~94)

五月九日、伊吹山の手前で後醍醐側、五辻宮の大軍が行く手をふさぐのを見た北探題の北条仲時はこれまでと判断して番場の蓮華寺で自害、従う兵たち四百三十余人も集団自決した。うち百八十九人については阿弥陀号を与えて供養した同寺の住持同阿良向が「陸波羅南北過去帳」に氏名年齢を書き残している。

(八) 千劍破城寄手南都に引く事 (p95~96)

第11巻輪読予定ページ (10月21日)

- (1) 166中にも~170 刎ね奉る
- (2) 171都には~173 竈となる
- (3) 174五月二十七~176 御願なり
- (4) 176二十八日~180 耳に満てり
- (5) 180京都、鎌倉~185 申すべき
- (6) 185さても~188 知られたり
- (7) 188長門探題~191 消えにけり
- (8) 191淡河右京~195 あはれなり
- (9) 195越中守護~199 死にける
- (10) 201京洛~204 かこたれける
- (11) 204同じき七月九日~

209 不思議なれ